

JSAPD 抄録

医療法人社団 幸誠会 たば歯科医院

理事長 多保 学

演題:一症例を通して長期予後を考える

近年インプラント治療は、オッセオインテグレーションの確立によって成功率が格段に高まり、適応症の拡大ならびに審美性の追求とともに順調に発展してきた。インプラント治療の長期的な予後に関しても良好な成績をおさめている事がすでに数多くの文献で証明されている。一方で、インプラント周囲炎の発症率は増加傾向にあり、インプラント患者の約80%がインプラント周囲粘膜炎を示し、10年経過報告では5人に1人がインプラント周囲炎に罹患しているとの報告もある。インプラント周囲炎は天然歯における歯周病との関連が深く、インプラントを長期的に安定した状態で維持していくためには天然歯を含めたトータルな口腔ケアが重要なポイントとなる。長期的な予後を考慮した場合、インプラント周囲炎を発症しないための予防的な診断、治療計画が特に重要になる。また全顎的治療が必要な症例では、天然歯のみで長期的な予後を考慮した補綴設計を考えた場合、その治療計画には限界があり結果的に非常にリスクが高くなる可能性がある。歯周補綴治療のためにクロスアーチのフルブリッジを使った症例などは、メンテナンス中にどこか一箇所でも不具合が生じた場合補綴物の再治療が必要になってくる。このような状況下でインプラント治療というオプションを効果的に組み込む事でそのリスクを回避できる可能性がある。ではどのような場合、効果的にインプラント補綴を活用できるのだろうか。Longevityを考慮したインプラント補綴の活用法とインプラント周囲炎のリスクファクターを再考し、長期的な維持安定のために必要な事項を著者の症例をもとに提示していきたい。